

金貳拾圓五拾五錢 會員よりの會誌代
 金參拾壹圓五拾錢 費、助員二十六人分會
 金壹圓 下村先生より御寄附
 金貳拾六錢 利子
 支出 金四拾壹圓四拾錢

内 譯

金參拾五圓參拾九錢 會誌七號印刷代
 金參圓 會誌發送代
 金貳圓 伊澤先生へ謝禮
 金壹圓拾錢 其他雜費
 差引殘高金四拾貳圓拾貳錢



◎母校たより

○大正第二の新年は大なる抱負を以て徐かに歩み來り申候、御代始めての祝賀式は講堂に於て

し言の由に承り候、善は必ずなせ悪は小なりともなす勿れとの力ある御聲は今なほ耳底にひびき居り候

○本校講師保科孝一先生新に御歸朝せられ候て文科三年の言語學を擔當せられ候

○限りなき平和の中に大正の新らしき紀元節を迎へ申候、午前祝賀式あり、教育勅語についで憲法發布に關する勅語を奉讀せられ候、遠く二千五百七十四年の昔、雲に聳ゆる高千穂の峰の白雲わけまして、青山四周の國に入らせ給ひける、皇祖の創業を仰ぐと共に、明治天皇の大偉業を偲び申候、此の偉大なる過去を讚美し希望多き將來を祝揚し滿腔の誠意をこめて祝賀のまごゝめを開き申候

○東校舎の建築工事は愈々進行いたし候て煉瓦校舎の後の空地は二棟の校舎にてみたまされ申候寄宿舎の玄關も只今工事中にて漸く舊觀を改めんといたし居り候

○四年生の卒業も日を以て數ふる様相成り候十三日宮城拜觀もすみ申候、人事と思ひ居りし奉

◎大正元、二、三年度分納附者

小川くんに 齋藤美禾 佐藤をみの
 磯島ツチノ 落合さよ

以上五名 金拾圓五拾錢

大正元、二年度分納附者

相川みほ 三宅こゝ 新家みす
 鈴木ふみ 高圓すゝ 五十嵐せい
 和 すみ 岩井ます

以上八名 金拾壹圓貳拾錢

◎大正元年度分納附者

清水しづ 杉山もこ 鈴木正
 河口せい 安藤しげ
 以上五名 金參圓五拾錢

舉行せられ候、校長より吾人の修養につき最も切實なる御訓話を承り申候、修養は掃除の如きものなりとは故の校長中村先生の生徒に諭され

職地の心配も今は我事に候、最後の學び舎を捨つる悲しみ御察し下され度候、蕾もかたき櫻の梢を仰ぐ時、我等の眼はくもるを覺え申候

○最後にきこえ上げたきは三月十二日簡野道明先生、下田たづ先生、波佐谷みち先生御退職遊されしことに候、我等が多年御薫陶を受けし諸先生に別れ奉るは、御同様誠に悲しきことに御座候。以上。

◎彦根より

御葉書拜見仕り候、愈御機嫌よく御つごめの由大慶の至に御座候、御繁忙中を會のため御盡力下され候事深く感謝し奉り候、御互に思ひ出おほき春は又も参り申候、博覽會に立ちて上野の花はもはや綻びをめし由のたより聞くからに彼の限りなき光榮と希望と歡喜とを以てさらば吾が友吾が學び舎とつきぬ名残を惜しみつゝふりかへりふりかへり都門を辭せし卒業當時の春の忍ばれて半ば嬉しく半ば悲しく感慨無量懷舊の情抑へ難く存候、大なる抱負を以て臨みしこ

の教育界當校に赴任以來まだ、新任だと思ふ中に我が受け持ちし級は一年を終へて二年となり又將に三年に進まんといたし居り候、もはや二年古株の教諭と相成り候、經驗はたしかに二年間ありと證明はいたせど其の二年間に於ける我が力やいかに実績や如何に思つて、至れば慙愧にたへず候、しかし私はこの二年間に於て「教育者の責任は眞に重大なるものなりこの重任に當る教育者の人格が如何に生徒に影響を及ぼすか」といふことを最も強く最も深く我れどわが心の底より感じ申候、ペンとノートとを持つて先生の講演を拜聴せし空想時代とかりにも教諭といふ肩書をもち責任を自覺して其の任に當る今日の感想とは其の強さを異にいたし候、今にして先生の御話も身にしみ先輩の注意も宜なりと納得いたし候毎日同じやうに教壇に立つておしやべりしつゝも一時間少くも四十人の生徒の智識に品性に何等かの影響を與へてゆくかと思へば決して寸時も等閑には附せられず其の任實に重大と存じ候まして級は級風を作り

學校は校風を作るは皆其の指導者の人格を表はすといふことを自らこの道にたづさはりて大いに感得いたしここに一層眞面目に新らしき覺悟を加へ候、生徒殊に自分が受持つ級などに親しみのますにつけ生徒の可愛さのますにつけはた自分の言ふ所をよくききよく守るにつけひとしほ我が身の不束を反省し恐ろしく感じ居り候、かゝる感想はごなたも御同感の事と存候、時々教育者の品性の上に於てとやかくと批難多き今日私共御互に相提携して大いに心を締めてかゝらねばならじと存候、近頃は學期末にて生徒の操行査定會なるもの開かれ生徒各自の品性につき話し合ふ都度一層責任を自覺せる昨今とてつひ／＼筆が走りつまらなきと書き列ね候、いづれ歸京後はせひ御面にかゝりいろ／＼御話いたさんと樂しみ居候、吹雪にとざれし當地も今や春の光ゆたかにみちて學校の堤には、や土筆の二三本をみつけ申候、此次の日曜日には近き野邊に芹摘まんと今よりたのしみ居候、遠足父兄會など事務たてこみ居り御返しもおくれ失禮

仕り候、先は延引ながら御返し迄 かしこ

三月九日

湖畔にて 竹田 俊子

◎三原より

筒井 たか

午後三時の放課の鐘がなる、さあ運動時間と先達の寒空にも羽織をぬいで出かけます。お笑ひ下さいますな私のラケットの手ぶりを。巴鬼にも入ります。時には旗ごりの競争に衆人歡呼の裡に馳せ歸ることもございます。多くは其の組をまけさして恨まれるのでございますが。四十分汗びつしよりで教務室へ歸り再び作文帳や書取帳など山の様な仕事を一つ／＼片付けます。歸宅は大概四時半か五時、母か一日淋しく暮して居ますので夜は大概自分の時間といたしません。朝少々の時間を勝手な讀書などにつかひます。

四日目四日目に寄宿舎へとまります。二百七十人の大家族なので在校中思つて居た様によい

工合には参りません。ともすれば過失をさせては其善後策を考へ、病氣させては養生法について苦心するなど、いつも消極の方ばかり力が注がれて誠にふがひないことでございます。こんな時にはやゝもすれば人数が少かつたらさぞ理想通りにせられるであらうと考へますが、かく考へては直ぐ打消するものがございます。中江藤樹先生は彼の近江國高郡小川の里で幾百の人、然も教育もない年齢の差のひゞい一つの群りを美しい堅い團結とせられたではないか、孔子も法を以てせず徳を以てすればよく民を治め得んといふ様な教へがある、どうして之れら多く温良な少女の一團を導きえられないことがありませうと何物かの叫聲によつて無能な材も策うたれつゝ勇氣を鼓して居ます。

舎の後苑は櫻山といふ五百尺の小丘の中腹までついで居ます。一寸お晝食後でも上りますと瀬戸の内海一目で梁川星巖先生が

他年夢裡問二陳迹一 細雨春帆、双鷺洲
と賛嘆せられた大鷲小鷲の二鳥は指呼の間に